要求いっぱい会員大募集！

「原発はいらない」の声あげ続けて

福島・南相馬支部

新婦人なら原発の話もできる

支部のある南相馬市は、2006年に小高町、原町市、鹿島町の3つの地区が合併してできた市です。2011年に大震災と東京電力によって原発事故が起こされました。3つの地域は福島第一原発から、ちょうど20キロ圏内に小高区、20～30キロ圏内に原町区、鹿島区は30キロ圏外に位置しています。いまも地区ごとに医療費や高速道路代などの支援策が線引きされ、住民同士の分断が残っているため、原発について意見が言いにくい状況です。

飯館村のコスモス畑でお出かけ班会（小高班）

現在の南相馬支部の地域にはかつて2つの支部がありましたが、原発事故後、会員も県内、そして全国に散りじりになり、1つの支部になりました。私たちの支部には分断がありません。ある会員のひとりは「ほかの地区の人とは、とても原発の話はできないけれど、新婦人なら安心して話せる」と言います。小高班の11月9日の班会には10人が参加し、持ち寄ったおかずを食べながら全国大会の報告を聞きました。初めて参加した会員が「とても楽しかった。これからも参加したい」とうれしい感想が。あぜみち班でも「しんぶんを読んでおしゃべりすることが楽しい」と好評です。この間、原発反対の運動の輪をひろげようと、支部で読者・知人など新婦人に誘いたい人の名前を出し合って行動し、2人の読者を迎えました。

運動のなかで会員がふえた

支部が2013年から他団体と一緒に始めた「原発なくそう金曜行動」は、11月21日で633回となります。毎週17時から駅近くの図書館前で、ギター伴奏に合わせて歌ったり、署名を集めたり、「原発の再稼働ゆるさない」などプラスターを持ってスタンディングしています。通学途中の高校生から「がんばって」と声をかけられたり、車から手を振ってくれる人も。この間、行動に参加していた吉田美恵子さん（75）を「新婦人の仲間になって、一緒に、原発反対の運動をしよう」と誘い、新婦人しんぶんを一緒に読むと、「新婦人が戦争を忘れず世代を超えて語り継ぐなど平和の行動をしていることがよくわかった」と入会しました。

2026年は福島第一原子力発電所の事故から15年です。高市新政権は、「原子力を最大限活用する」という自民・公明政権による第7次エネルギー基本計画を引き継ぎ、原発の再稼働や新増設を進めようとしています。二度と原発事故も分断もあってはなりません。私たちの声は小さいけれど、草の根の運動は強いと信じて、「分断より連帯を」「人の犠牲の上に成り立つ原発はいらない」と運動の輪をさらに広げていこうと話しています。

「原発なくそう金曜行動」で、吉田さんがスピーチ（右から2人目）

談話

高市首相の「台湾有事」発言と「非核三原則見直し」は撤回を

新日本婦人の会副会長　平野恵美子

高市早苗首相が11月7日、衆議院予算委員会で中国による「台湾有事」が発生すれば「存立危機事態になり得る」と述べたことが、外交・経済問題に発展しています。

2015年に強行された安保法制は、直接攻撃されていなくても政府が「存立危機事態」と認定すれば日本は集団的自衛権を行使できるとしています。高市首相は、台湾有事でアメリカが軍事介入し中国と戦争になった場合、自衛隊が参戦することを明言したことの重大さをわかっているのでしょうか。1972年の日中国交回復以来、紛争の平和的解決や互いに脅威とならないことを確認し積み上げてみた平和友好の原則を踏みにじり、台湾有事と「存立危機事態」の関係について明言しないとしてきた「政府方針」からも逸脱しています。何より、「台湾有事」などと軽々しく口にすべきではありません。事態の収束をはかるには、答弁の撤回以外にありません。

さらに来年の安保3文書改定に向けて、日本が「国是」としてきた核兵器を「持たず、つくらず、持ち込ませず」の非核3原則について、「持ち込ませず」を見直す検討まで始めています。広島、長崎への原爆投下から80年、核兵器が使われなかったのは、被爆者の証言と市民の運動が「核兵器は使ってはならない」と、核兵器禁止条約に結実させてきたからです。核兵器禁止条約への参加こそ、急ぎ検討すべきです。

高市首相の一連の言動は、いたずらに危機をあおり、戦争を引き起こしかねません。ただちに撤回し、日本国憲法にもとづく平和外交に力を尽くすよう求めます。

2025年11月21日

〈月1回〉

あなたの笑顔を見たくて⑥

訪問介護の現場から

京都・ヘルパーステーションこまり所長　妹尾真由美

今を生きるお手伝いを

人生100年時代―平均寿命や健康寿命の延びにより近い将来、100歳まで生きるのが当たり前になる時代がくるという。元気で長生き、これが一番理想であるが、利用者の多くは何らかの疾患を抱えている。

「もう長いこと生きたし、お迎え、はよ来てほしいわ」「生きてても、なんもええことあらへん」「みんなに迷惑かけるだけで、なんの役にもたってない」

こんな言葉を利用者からよく聞く。時には笑いながら時には悲壮感に満ちた表情で。どんな気持ちなのか、どんな風に受け止め、言葉をかけたら良いのか、悩むこともしばしば。最期の時まで、その人らしい暮らしを実現するためには、その人の歩んできた人生を知ることが欠かせない。利用者にとって大切なことは何か、何が好きだったのか、どんな仕事をしてきたのか、どんな日々を送ってきたのか。やりたいこと、嫌いなこと、得意なこと、苦手なこと、こだわりは何なのか。その人が生活してきた軌跡＝生活史を知れば、利用者にとってより良いケアにつながるヒントが見いだせる。

（記事とは関係ありません）

本人からだけでなく、家族や友人など周りの人からの協力を得て人となりを知る。積極的なコミュニケーションをとることでその人の人生のエピソードを収集していく。その人を丸ごと受け止める。その時、自ずと言葉が出てくるのではないか。利用者の多くは不安や孤独、喪失感を持っている。「死」というワードは今までタブー視される感があった。「死」を意識するということは「今を生きる」ことを考えるきっかけになる。最期の時までその人らしくどう生きるかという話をよく利用者とする。わたしたちヘルパーは何ができるか、自問自答している毎日である。

その人に寄り添う姿勢で、どんな表情でどんな言葉で語られるのか、一字一句も見逃さないように耳を傾ける。明るく前向きに、その人が今を生きるお手伝いをするために、私たちはいつも笑顔を絶やさず、今日この一瞬でも笑顔になってもらえるよう、日々訪問する。

（おわり）